

# ナイト・サイト・ミュージアム

—平城宮跡の活用に関する実践的研究—

## 1 はじめに

2024年2月、平城京左京三条一坊二坪発掘調査（平城第658次調査）において、聖武天皇の大嘗祭に関する木簡が出土した。奇しくも、聖武天皇即位1300周年の年である。これを記念して開催した、令和6年度平城宮跡資料館秋期特別展「聖武天皇が即位したとき。—聖武天皇即位1300年記念—」（期間：10/18～12/6）に際し、木簡のみならず平城宮跡で大嘗宮跡の遺構が検出されていることを周知し、来訪者に資料館での展示と平城宮跡現地との関係性を体験的に理解していただくため、平城宮跡資料館を夜間開館し、大嘗宮跡現地へ来場者をいざなうイベント「ナイト☆サイト☆ミュージアム」を実施した（図129）。

## 2 概要

実施日は、2024年11月23日（土・祝）、時間は日没（16：48）後の17：00～20：00とした。会場は、平城宮跡資料館、第一次大極殿院大極門前、東区朝堂院である。奈良研・平城宮跡管理センター主催、奈良女子大学共催にて実施した。企画内容は、01 大住隼人舞・大嘗祭音楽上演、02 灯りの遺構表示—再現悠紀殿、03 資料館の夜間開館、04 大嘗宮跡ナイト☆ツアーの4つの柱から構成し、関係者を含む248名（01のプログラム配布数より推定）の来場者を得た。

平城宮跡の活用に関する実践的研究では、従来より資料館と平城宮遺跡現地とをシームレスにつなぐ企画立案を重要なテーマとして掲げていた。聖武天皇即位1300年という記念すべき年に紀年名木簡が発見された奇跡的な機会を活かし、大嘗祭しながら大嘗宮跡で秋の夜間イベントを実施することを目指し、企画が始まった。急遽の企画立案ではあったが、これに賛同する関係機関・企業・団体・個人の協働により本企画の実現に至った。

夜間は暗闇と化す平城宮跡において、聖武天皇が即位した時に思いを馳せる体験を演出するためには、幻想的な音楽と灯りによる表現が必要であると考えた。そこで本企画では、音楽監修として古代楽器研究者でもあるピアニスト・作曲家の榊原明子氏、美術監修として考古学



図129 ナイト・サイト・ミュージアムちらし

に精通し復元楽器制作に取り組む美術工芸家の菊池孝氏に協力を依頼した。以下、実施時間順に報告する。

## 3 夜間開館と大嘗宮跡ナイト☆ツアー

平城宮跡資料館と復原事業情報館の2館について、20：00まで夜間開館をおこなった。11月下旬の肌寒い時期のため、来訪者の安全確保の観点からも空調設備の整えられた施設の開放は必要であった。

**ナイトツアー** 大嘗宮跡が確認されている中央区と東区朝堂院を案内するナイトツアーを実施し、49名の参加者を得た。暗闇の平城宮跡を安全に案内するため、約10名毎に5班を編成、各班をNPO平城宮跡サポートネットワークのガイドが引率し、ボランティアの大学生（平城京天平行列実行委員会運営）が古代風の衣装を着用して補助にあたった。暗闇での視認性を高めるため、ツアー参加者に色違いの腕輪型サイリウムライトを配布、着用を依頼した。当日16：30から資料館にて先着受付、定員に達した班から順に17：00までに資料館を出発、中央区朝堂院を経て17：30前後に東区に到着した。灯りの遺構表示を見学したのち、18：20までに中央区の大極門へ案内して解散した。

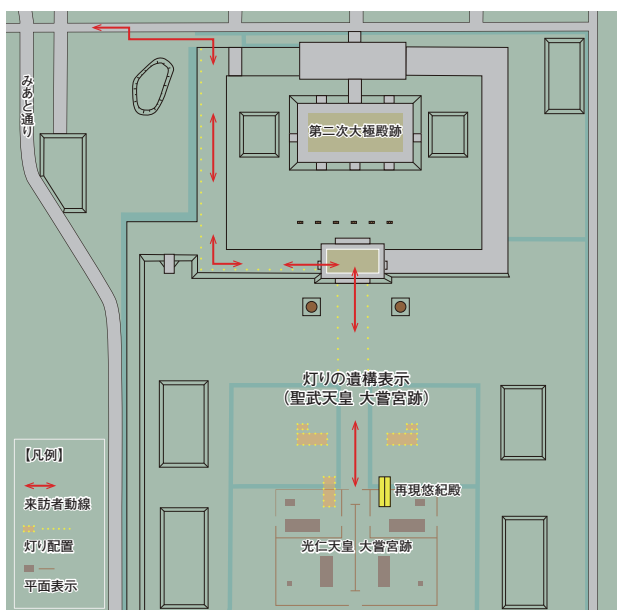


図130 東区朝堂院 実施配置図

#### 4 灯りの遺構表示ー再現悠紀殿

**大嘗宮遺構** 東区朝堂院では、元正・聖武・淳仁・光仁・桓武天皇、計5期の大嘗宮の遺構が確認されている。そのうち光仁天皇期の建物と塀の位置が、平成の大嘗祭がおこなわれた平成2年にレンガ敷の平面表示として整備されている。しかし表土の被覆により埋没しがちであることが管理上の課題となっている。令和元年の改元にあたり、本表示を顕在化するため表土除去工事をおこなったが再び埋没、今回も文化庁に表土除去を依頼した。

**表現方法と対象** 大嘗宮は、大嘗祭を執りおこなうための仮の宮であり、儀式が終了すれば取り壊される。これに倣い、一夜限りの建物を灯りの表現と共に出現させることとなった。表現する大嘗宮遺構は聖武天皇期の正殿・膳屋・白屋で、規模があきらかでない垣は除いて東西対象の6棟とした。予算上の制約から建物の規模を3次元的に表現するのは悠紀院正殿1棟とし、ほかの5棟は柱位置を灯りで示すこととした(図130)。

**再現悠紀殿** 悠紀院正殿(以下、悠紀殿)の設計および制作は菊池孝氏に依頼、単管組み立てによるメタルワークオブジェとして設計・制作いただいた。設計では、検出遺構の柱間を踏まえ『貞観儀式』『延喜式』の記載を参考に、材料となる単管の組み立て上の制約を加味して、桁行方向は柱間2.4m×5間、梁行方向は柱間2.0m×2間、棟高4.5m、側柱3.0mに基本寸法を決定した。また、遺跡の上の仮設建物として掘削をともなわない置型とし、かつ多少の風雨による転倒防止・安全性確保の



図131 灯りの遺構表示(再現悠紀殿、北西から)



図132 灯りの遺構表示(主基院 膳屋・白屋)と第一次大極殿(南東から)

ため、南北棟となる悠紀殿の北面・西面を正面として、東面・南面にこれを支える支柱を配置した。いわゆる“完成形”でない姿に鑑賞者が一夜限りの建物であるという想像を膨らませることのできるオブジェとなった。なお単管は、奈文研が発掘調査の現地説明会等で使用する足場用の単管を白色に着色して活用いただいた。

**映像制作** 再現悠紀殿をほのかに照らし、出土木簡に記載の品々を備えた儀式がおこなわれたことを想起させるため、菊池氏の監修のもと、画家の寶田海奈氏が「延喜式」の記載内容を参考に手書き原画を描き、これを素材として映像を制作した。メタルワークの壁面に垂らした不織布にプロジェクター4台にて、悠紀殿内に品々を携えた人々が静々と入っていく映像を投影した(図131)。また榊原氏による大嘗祭音楽のうち「千載」をBGMとして建物屋内から低く響かせ、没入感を高めた。

**柱位置表示** その他5棟の柱位置を、安価な材料で品良く表現できないか検討した。菊池氏、寶田氏による試行実験により、円形にカットした半透明プラスチックダンボールに竹串で五徳状に3つ脚を付け、電池式置型円形ライトの上に被せることで、美しい光の拡散を得られることがわかり採用した。草地における固定も容易で、予想以上に質の高い表現ができた(図132)。(高橋知奈津)

表23 大嘗祭音楽 演目・楽器編成・演者一覧

進行	演目（※1は榊原明子作曲）	曲解説（※2は東京案所『日本古代歌謡の世界』解説を参考）	演者
開演前BGM	「大直日合音取」 「大直日歌」（国風歌舞）	大嘗祭前日の鎮魂祭（鎮魂の儀）にて演舞される曲。 「倭歌」と対曲。	三浦元則（歌方）・梅田真史（付物）
	「日出ずるところ」※1	日の出、文明開化など、何かが始まる様を描いた曲。	榊原明子（シンセサイザー、笙）
前半演奏	「倭歌」（国風歌舞）	大嘗祭前日の鎮魂祭（鎮魂の儀）にて演舞される曲。 「大直日歌」と対曲。※2	三浦（歌方）・梅田（付物）
	「小前張阿知女」（神楽歌）	神遊びを象徴し、古代歌曲では珍しい二重唱。大嘗祭では大嘗宮にて奏される。※2	三浦（本拍子）、梅田（末拍子）、和田篤志（和琴）
	「千歳」（神楽歌）	古来より大嘗祭の最後に奏される結尾曲。新天皇の御世が幾久しく、千年も万年も続くよう祈りを込めて歌われる。※2	三浦（本拍子）、梅田（末拍子）、和田（和琴）
大住隼人舞	「追吹」	舞人の登場曲。	大住隼人舞保存会
	「お蔵いの舞」	神々をお迎えするため、舞人が自らや舞台を清める舞。	
	「神招の舞」	舞台に「月読の神」「天津神」「国津神」その他八百万の神を呼び招く舞。	
	「振剣の舞」	穢れを払い、隼人の勇ましさを誇示する舞。	
	「盾伏の舞」	盾を持ち、外からの悪霊を防ぐための舞。	
	「弓の舞」	弓の技術を誇示し、狩猟の豊作を祈るための舞。	
	「松明の舞」	八百万の神々に感謝の意をしめす舞。	
後半演奏	合歓塩「太平楽急」	管絃、舞楽曲、唐楽。成立は平安期で時代は下るが、明治天皇の即位の大礼以来、大嘗の2日目に武舞する代表曲として萬歳楽と共に舞われる。	三浦（箏篋）、梅田（龍笛）、和田（笙）
	「万葉レクイエム」※1	奈文研・平城宮跡管理センター共催 2024年度夏期企画展「万葉挽歌」BGM音楽として作曲。悲劇・苦悩に満ち悲劇の人生を歩んだ万葉の歴史的人物たちへのレクイエム。聖武天皇や来場者の安寧を祈って選曲。生演奏では本公演が初演。	石川憲弘（復元琴）、石川利光（尺八）、榊原（ピアノ）、三浦（箏篋）、梅田（横笛）、和田（笙）
アンコール	「隼」（大住隼人舞「盾伏の舞」楽曲編曲：榊原明子）	鹿児島から意気揚々と奈良へと上り、都の護衛に邁進する様子や、夜は宴会を開き、盛り上がり酔っ払い、酔いが舞った頃にはふと故郷が懐かしくなり望郷に浸る、というイメージ。生演奏では本公演が初演。	石川憲（復元琴）、石川利（尺八）、榊原（キーボード）、三浦（箏篋）、梅田（横笛）、和田（笙）、奈良女子大学復元楽器プロジェクト
	「あけぼの」※1	聖武朝は飢饉や天然痘流行など決して平穏な時代ではなかった。どんなに苦しい日々でも日はまた昇る。日本国が始まったこの奈良から、また新たな文明・文化・芸術が芽生え栄えることを祈って選曲した。	石川憲（復元琴）、石川利（尺八）、榊原（ピアノ）、三浦（箏篋）、梅田（横笛）、和田（笙）、奈良女子大学復元楽器プロジェクト
終演後BGM	「隼」	上記参照。音源には、奈文研研究員・職員による吠声も収録。	石川憲（復元琴）、榊原（シンセサイザー、笙）、三浦（箏篋）、梅田（横笛）

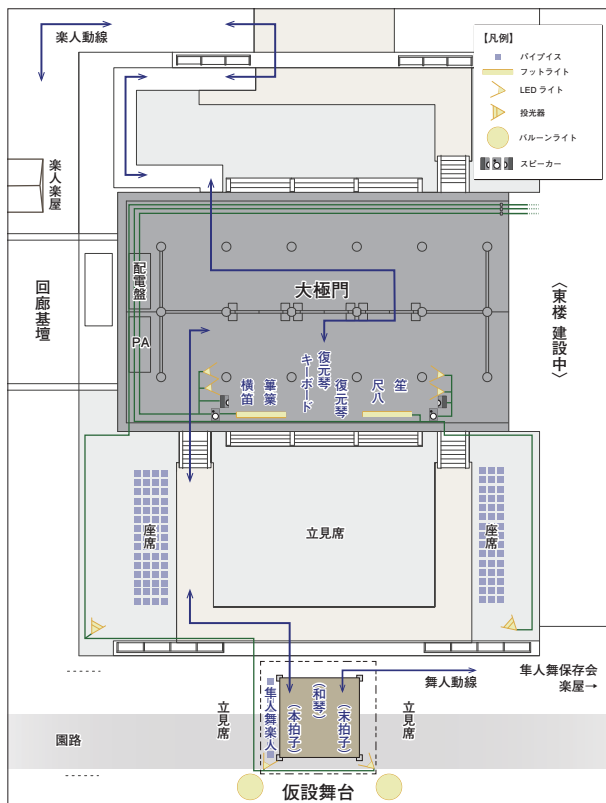


図133 大極門前 舞台配置図

## 5 大住隼人舞と大嘗祭音楽の上演

**経緯** 本企画は当初、東区を中心会場として立案したが、音楽による演出のあり方を練る過程で、資料館から東区をつなぐ途中に位置する大極門を会場に、夜間の復元建物の活用実践として音楽上演を実施することとなった。上演演目の立案、出演者の出演交渉は榊原氏に、美術監督を菊池氏に依頼し、会場設営は関係者にて協働した。照明は温かみのある暖色系、衣装は色を抑え古式な雰囲気となるよう狩衣や楽人・童子の衣装を活用した。

**コンセプト** 本公演では、聖武天皇大嘗祭音楽の再現と、聖武天皇の御代をイメージした音楽の創造をコンセプトに、公演本編に加え開演前後のBGMまでトータルでの演出を試みた（BGMは本公演出演者他の協力を得て、本公演のために事前に録音・編集した音源を使用）。

平城宮跡の広大な土地と、大極殿を門間から垣間見える大極門という素晴らしい立地を生かし、大極門基壇上と大極門前仮設舞台の2ヵ所に舞台を設け（図133）、演目もそれにあわせて大きく2つに分けた。鎮魂祭から始





図134 仮設舞台での大住隼人舞上演（盾伏の舞）

まり聖武天皇大嘗祭が終わるまでの儀式進行にあわせた短い時間軸、古代から現代への1300年以上の時を超える長い時間軸、この2つの時間軸から構成した（表23）。

**聖武天皇大嘗祭の音楽** 鎮魂祭で奏される国風歌「大直日合音取」「大直日歌」のBGMで始まり、前半は、結界を張った大極門前仮設舞台にて、三浦元則氏（東京楽所所属）をはじめとする雅楽師らに国風歌「倭歌」、神楽歌「小前張阿知女」「千歳」を演奏いただいた。日本最古の楽譜は正倉院紙背文書（奈良時代）にあるメモ書き程度の琵琶譜で、近衛家が伝えた『琴歌譜』は平安初期のものである。今回は、東儀信太郎、芝祐泰、多忠磨など宮内庁式部職楽部楽長らが記した文献・音源等を参考に、聖武朝期には既に成立していたと考えられる曲を選曲した。また、聖武天皇大嘗祭の内容を記した古文書は現存しないため、平安時代前期編纂『貞観儀式』・中期編纂『延喜式』の鎮魂祭・大嘗祭儀式進行に沿うよう構成した。その際、舞台進行や楽器・音程の都合により一部変更はあるが、雅楽師 三浦元則氏と相談の上、聖武天皇大嘗祭音楽の再現を目指した。

**大住隼人舞** 次に、大住隼人舞保存会による隼人舞「お祓いの舞」<sup>おおすみはやとまい</sup>「神招の舞」<sup>かみおき</sup>「振剣の舞」<sup>ふりつるぎ</sup>「盾伏の舞」<sup>たてふせ</sup>「弓の舞」<sup>ゆみ</sup>「松明の舞」<sup>たいまつ</sup>全6種を演奏いただいた（図134）。大住隼人舞は昭和46年に復興、昭和50年に田辺町（現京田辺市）の無形民俗文化財に指定され、以降保存会により継承されてきた舞で、地元の小中学生などが舞人と楽人を務める。復興にあたり平城宮跡出土の「隼人の楯」を参照するなど、これまでも平城宮跡と縁があり、宮跡現地での演奏は2010年以来2回目の上演である。文化財保存活用の地域間交流として、また平城宮跡の歴史に鑑みて大変意義深いものとなった。

**復元楽器を交えた演奏** 後半は、大極門基壇上に舞台を移し、古代から現代への奈良・日本音楽の変遷を辿るような演目・楽器を選定した。雅楽三管による太平楽急「合飲塩」の後、藤原京右京十条四坊遺跡出土琴（古墳時



図135 大極門での演奏（後半）

代）の復元琴、平城京左京七条一坊大路出土琴形（ミニチュア琴、奈良時代）の3倍大の復元琴、正倉院にも収蔵されている尺八、デジタルシンセサイザーが加わり、古墳時代から現代までの楽器を一堂に介して榊原明子作編曲「万葉レクイエム」「隼」「あけぼの」を演奏した（図135）。「隼」は隼人への敬意を表して「盾伏の舞」音楽を編曲した楽曲で、終演後のBGMでは奈文研職員一同による吠声を収録した。時空を超えた音楽を紡ぐ貴重な時間となった。

（榊原明子／奈良女子大学大学院）

## 6 展 望

企画立案の6月から実施まで短期間で予算も限られる中、企画に賛同し尽力いただいた関係者の情熱によって、平城宮跡でしか実現し得ない体験の提供が実現できた。平城宮跡の活用実践として、特にアーティストとの協働という点で様々な学びが得られた。埋蔵文化財である遺跡の価値や学術的成果を地上でどのように伝えるかという課題において、モノの研究を主体とする考古学のアプローチでは、儀式や音楽は復元が困難な対象である。これを現代の私たちが幾分かでも体験的に知ろうとすれば、そこには現代的な創作を加える必要がある。監修いただいた榊原氏、菊池氏ならびに演奏家の方々の史実に敬意を払った創造力が無ければ、このような体験は得られない。適切な役割分担と十分な予算の確保のもとに、遺跡の保存活用の文脈でも「創造」が必要であることを実感することができた。

（高橋・神野 恵）

### 謝辞

ご協力いただいた皆様に、記して感謝の意を表します。平城宮跡管理センター、奈良女子大学、ピアノで奈良を奏でる会、ArtWorkアトリエ菊池、大住隼人舞保存会、奈良女子大学復元楽器プロジェクト、大阪樟蔭女子大学小林政司研究室、朴東驥（大韓民国城南アートセンターCUBE美術館チーフマネージャー）、株式会社NMG Studio、NPO平城宮跡サポートネットワーク、平城京天平行列実行委員会、国営飛鳥歴史公園事務所、竹中工務店、文化庁、ひかり装飾株式会社、有限会社ワーク、株式会社豊国、宅配お弁当しあわせ家。このほか、関係者・ご協賛の皆様は心より感謝申し上げます。